

「女オタク」の表象

— 女性向け雑誌『anan』を例に —

西山 知里

1 はじめに

1.1 研究の射程

「趣味」とは誰による、どのような活動を指すのだろうか。

近年、「オタク」という、ある種の趣味実践をカテゴライズする言葉が生まれた。当初は漫画やアニメ、ゲームに強い関心を持つ人々を指していたその言葉は、「歴史オタク」「健康オタク」などのように特定の領域に強い関心を持つ人々に対しても使用されるようになっていく。

加えて、「オタク」という言葉が人口に膾炙した現在においては、なんらかの趣味に熱狂している人物が「オタク」として自称（または他称）する／しないにかかわらず、その人物が自己を検討するとき「オタク」という概念と自らを照合してみることは避けられないと考える。すなわち、現在の趣味実践は、つねに「オタク」という概念と隣り合わせにあるともいえる。

そこで本研究では、「オタク」という人格像を仮定するのではなく、漫画・アニメ・ゲーム・映画・読書・タレントといった分野における趣味活動を「オタク的趣味実践」と定義し、女性向けライフスタイル誌『anan』における「オタク的趣味実践」がどのようなものかを分析する。『anan』において、「オタク的な」実践が掲載される際にどのようなロジックが機能しているのか、ひいては女性の趣味活動がどのようにとらえられているのかを考察するのが本研究のねらいである。本研究の意義は以下のようにとらえることができる。

1 点目は、「ひらかれた『女オタク論』の達成」である。女性向けライフスタイル誌が漫画・アニメ・映画といったコンテンツをとりあげるとき、雑誌は記事というコンテンツの作り手であると同時に（既存のコンテンツどうしを記事という形で結びつけ、一定の解釈枠組みのもと編集するという点において）コンテンツの受け手でもある。ゆえに、コンテンツ／雑誌／読者の三者関係に注目するとき、雑誌はコンテンツとしての性質と読者としての性質を併せ持つといえる。よって、女性向け雑誌における「オタク的趣味実践」を研究することで、「女オタク」当事者の中のみ依存する知見でもなく、「女オタク」当事者の外にのみ依存する知見でもない、ひらかれた知見を得ることができると考える。本研究は女性向け雑誌における「オタク女子」の表象を分析した池田太臣（2012）の関心を引き継ぐものであるが、2010年代後半～現在にかけての女性向け雑誌において「女オタク」がどのように表象されてきたのかについて先行研究は十分な回答を出すに至っておらず、雑誌というメディアにおける「オタク的趣味実践」のあり方を追うと

いう意味合いにおいても本研究は十分な新規性を持つと考えられる。

2点目は、「女性の趣味実践をとりまくジェンダー規範を明らかにする」ことである。「オタク的趣味実践」が『anan』でとりあげられるとき、雑誌の作り手たちが「掲載する価値あり」と判断した(=「『anan』の読者層に訴求する」と考えた)なんらかの思考の道筋があると考えられる。このロジックを明らかにすることで、逆説的に「どのようなロジックを経由しないと『オタク的趣味実践』を雑誌メディア内でとりあげることはできないのか」という疑問に応答しようとする。加えてそれは、「女性の趣味実践にかかわるジェンダー規範を明らかにする」こととも接続可能であるはずだ。

本稿は以下のような構成となる。研究の射程とリサーチ・クエスチョンを本章で確認したのち、続く第2章では「オタク」に関連した先行研究、ならびに近年の「女オタク」が置かれた状況について概観する。第3章では『anan』の記事を量的・質的に分析し、『anan』における「オタク的趣味実践」が成立するためのロジックを示す。第4章では前章の内容を踏まえ『anan』にわたる「女オタク」/「オタク的趣味実践」がどのようなものであるかを考察する。第5章ではこれまでの内容を俯瞰し、今後の研究の展望を示す。

なお、本研究では、調査対象が女性向けライフスタイル誌である性質上、その雑誌のメインの読者層として想定されている(であろう)「シスジェンダーかつヘテロセクシュアルである女性の」趣味実践について分析・考察することとなるが、男女二元論のもと多様なセクシュアリティを否定したり、異性愛主義を称揚したりする意図は一切ないことにご留意いただきたい。また、記事分析においては「『オタク的趣味実践』の裏には〇〇というロジックがある」という記述のあり方を採用することもあるが、この主語はあくまで「『anan』という雑誌が」というものであり、『anan』読者の読みのあり方やその他の人々による「オタク的趣味実践」のあり方を限定するものではない。

1.2 リサーチ・クエスチョン

以上より、本研究のリサーチ・クエスチョンを、「雑誌『anan』において『オタク的趣味実践』を取り上げた記事内では、どのようなジェンダー規範が機能しているのか」に設定する。

2 先行研究における「オタク論」

2.1 誕生、そして2000年代までの「オタク」

そもそも、趣味に邁進する人々が「オタク」と呼ばれるようになった¹⁾きっかけはなにか。松谷創一郎は、1983年に『漫画ブリッコ』において中森明夫が書いたコラムがその一因であるとしている(松谷 2008: 116)。松谷は、そのコラムにおける「オタク」像を「①マニア性：何らかの対象への熱中と偏愛、②内向性：性的コミュニケーションからの退行、③共同性志向：内弁慶な仲間意識、④外見的特徴：ファッション性の低さや身体的特徴」(松谷 2008: 116)の4点から

なると指摘している。

しかし2000年代以降になると、匿名掲示板・2ちゃんねる（現・5ちゃんねる）上の書き込みを元にした書籍『電車男』がヒットする（のちにドラマ・映画化）など、「コミュニケーションに自信をもてない〈オタク〉男性が、恋愛関係に踏み出していく過程を描いている」（松谷 2008: 134）フィクションが登場する。

加えて、池田によれば、『電車男』ブームと並行して「二〇〇〇年代中頃に『腐女子』（引用者註：男性同士の恋愛／性愛を主題とする創作ジャンル・ボーイズラブの愛好者を指す用語²⁾）が注目されるようになって以降」、「オタクといえば暗に男性のオタクを指していた」（池田 2012: 140）メディアの状況に変化がみられた。すなわち、「腐女子」が登場するマンガが複数刊行されただけでなく、週刊誌や新聞でも彼女たちが取り上げられ、「オタク的行動様式＝男オタクの行動様式という図式」の相対化が起こったのである（池田 2012: 141-2）。

また、若者たちの自己認識にも変化が起こった。辻泉が2005年に東京都杉並区在住の男女1000人に行ったアンケート（うち有効回答数266）によれば、「自分には『オタク』っぽいところがあると思う」という設問に「あてはまる」「まああてはまる」と答えたものは46.6%に達した（辻 2012a: 315, 325）。そればかりか、「『オタク』は楽しそうだ」という設問に「あてはまる」「まああてはまる」と答えたものが74.4%にのぼったという（辻 2012a: 316）。辻はこの結果について、「かつてのような、現実に対応できず虚構に関心を向けるしかないものたちといったネガティブなイメージではなく、むしろオルタナティブな文化の快樂の巧みな享受者といった、ポジティブなオタク像があるのではないだろうか」（辻 2012a: 316）と指摘している。

その後「二〇〇九年以降になると、ファッション誌・モード誌とオタク文化の結び付きが見られ」、ファッション誌においてマンガ特集が組まれたり「萌え」をタイトルに冠した記事が書かれたりする動きもあった（池田 2012: 142-3）。それでは、2010年代以降はどのような動きがみられるのか。

2.2 2010年代以降の「女オタク」

2.2.1 「推し」の伝播

2010年代以降の「オタク」を紐解くうえで欠かせないキーワード、それが「推し」である。これはアイドルファンの中から生まれたとされる用語であり、「応援している」「お気に入りである」というニュアンスを含む。2021年には宇佐見りんによる小説『推し、燃ゆ』が第164回芥川龍之介賞を獲得しており、以上のような用法はある程度の知名度があるといえよう（好書好日編集部 2021）。

加えて、「推し」という単語を含む特集は近年の女性ファッション誌においても多くみられる。例えば『mini』2021年8月号の特集「毎日が宝物！ 推しのために生きるっ♡」（宝島社 2021）や、『GINGER』2020年6月号特集「人生を楽しくする推しゴト」（幻冬舎 2020）などがある。『CanCam』2020年5月号では「推し活女子の願いを叶える便利なページ満載のノー

ト『推し活手帳』(CanCam.jp 2020)と『名探偵コナン』の登場人物があしらわれたグッズが付録となっており、これらからは女性の「オタク的な」趣味活動が公にされ、またファッショナブルなものとして表象されつつある現状がうかがえる。

2.2.2 「浪費」の称揚

2010年代の「女オタク」を考えるうえでもうひとつ重要なポイントが、「『浪費』の称揚」である。これには、「それぞれ違うオタク趣味を持つアラサー女4人組」(劇団雌猫 2017: 4)からなる文筆サークル・劇団雌猫による著作『浪費図鑑——悪友たちのないしょ話』(2017)や『シン・浪費図鑑——悪友たちのないしょ話2』(2018)が大きく影響している。

『浪費図鑑』シリーズは「〇〇で浪費する女」というフォーマットで項目分けされており、ゲームやアイドル、俳優や宝塚歌劇団のような自らの愛好するコンテンツに対して多くの金額を費やす、すなわち浪費をすることを生きがいとする女性たちの寄稿を掲載している。そこで説明される「女オタク」のライフスタイルは、「週末を幸せに生きるために日々働き、お金を稼いでいると言っても過言ではありません。趣味のために仕事もめっちゃめっちゃ頑張る」(劇団雌猫 2017: 4)というものだ。自らの愛好する対象を応援するために多額の金銭を使う「浪費」は、「女オタク」たちの中ではメインストリームとなりつつあるのである。

3 『anan』分析

3.1 『anan』概観

『anan』は1970年に平凡出版(現・マガジンハウス)から創刊され、当時はフランスの雑誌『ELLE』と提携していた(井上輝子・女性雑誌研究会 1989: 37-8)。内容面の当時の特徴としては、斎藤美奈子が指摘するように、炊事や片付けといった「『家事』や『花嫁修行』の領域にあったもの」をクッキングやインテリアという言い換えを行うことにより「ことごとくカジュアルな趣味・消費の対象」として変貌させたことがある(斎藤 [2000] 2003: 268)。

現在の『anan』における特徴としては、①特集主義、②週刊誌であることの2点があげられる。牧野智和によれば、創刊当初はファッション関連の記事が多かったが、1990年代以降はライフスタイルに関する記事が増加(牧野 2012: 139)しており、現在では毎号ごとに恋愛やライフスタイル、エクササイズなどのワンテーマに基づいた巻頭特集が組まれている。一般社団法人日本雑誌広告協会(2022a; 2022b)の分類によれば、現在は「女性ヤングアダルト誌(=25~39歳の女性向け)」に分類されており、2019年10月から2020年9月における印刷証明付き発行部数(1号あたりの平均部数)は145040部である(一般社団法人日本雑誌協会 2022)。現在は「anan web」と題し、独自サイトでの展開も行っている(「anan 総研」という読者を起用したサイトもある)。

それでは、「女オタク」や「オタク的趣味実践」について考察するうえで、なぜ『anan』を分

析対象として設定する必要があるのだろうか。その理由は、「オタク」という用語が広まった1990年代以降において）女性のライフスタイルを中心に取り上げており、かつ現在に至るまで一定の部数がある定期行物だからである。創刊50周年特別記念号に「すべての女性の、いま好きなこと」（2020.3.11）というスローガンが掲載されているように、『anan』は女性が興味を持つ話題にフォーカスすることが特徴であり、その時々々の風俗をよく捉えている、と考えることができる。加えて多くの女性が読むため、（肯定的な記述であれ否定的な記述であれ）その時々々の社会において「当たり前」とされている価値観を踏まえている、と想定可能である。ゆえに、「『女オタク』はどのような存在として想定されているのか」「『女オタク』という類型はどのような力によって形作られたのか」を問題意識としている本稿の目的を十分満たしていると考えられる。

3.2 分析枠組み

本章では、『anan』の第1特集（＝その号の主題となっている特集）の中から「オタク的趣味実践」について取り上げられたものの質的分析を行う³⁾。上記の分析は2000年1月14日号から2020年12月25日号までの21年分、計1032号が対象であり、京都文教短期大学図書館にて閲覧した（2001年10月24日号、2005年4月13日号は当該図書館に所蔵がなく、分析対象から外している）。また、2008年以降の号に関しては、『anan』の発行元であるマガジンハウス社のホームページに掲載されたバックナンバーの情報も参考とした（マガジンハウス 2022）。

これらの基準を適用したうえで、「エンターテインメント全般」、「芸能・タレント」、「テレビ」、「映画」、「アニメ」、「本・漫画」が主題であると判断できるものを「オタク的趣味実践」に分類可能な特集であると定義した。それらの特集の記事を、後述する「愛の読み替え」実践／「夢女子」の実践／「2.5次元」の実践という3つの尺度でコーディングしている。

3.3 第1特集分析

本稿での分析対象となる「エンターテインメント全般」、「芸能・タレント」、「テレビ」、「映画」、「アニメ」、「本・漫画」の計6項目に分類されたのは、表1-1、1-2にある計70特集である。

2000～2008年においては、男性芸能人を読者アンケートをもとにランク付けした特集「好きな男・嫌いな男」に代表される、芸能・タレントに特化したものが大半を占め、それ以降は本・漫画や映画、テレビに焦点を当てた特集が増加した。加えて、2010年代後半になるとエンターテインメント全般を取り扱う特集が頻出するようになった。

ここからは、抽出号を①「愛の読み替え」実践、②「夢女子」の実践、③「2.5次元」の実践、の3点から分析する。これらは、上記計70特集に含まれる916件の記事に対して実施したコーディングの結果によるものである。

表 1-1 2000～2010 年項目推移

分類項目	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
エンターテインメント全般	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
芸能・タレント	3	3	3	1	1	1	1	1	1	1	1
テレビ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
映画	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
アニメ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
本・漫画	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
合計	3	3	3	1	1	1	1	1	1	1	4

表 1-2 2011～2020 年項目推移

分類項目	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2000～2020年総計
エンターテインメント全般	0	1	2	2	0	1	4	2	4	5	21
芸能・タレント	2	1	1	5	2	2	1	0	1	1	33
テレビ	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	3
映画	1	1	0	0	1	0	0	1	1	0	5
アニメ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
本・漫画	1	1	0	1	1	1	0	0	0	0	7
合計	4	5	4	8	4	4	6	3	6	6	70

3.3.1 「愛の読み替え」実践

「愛の読み替え」実践は、東園子による宝塚歌劇団やボーイズラブのファン研究を援用したものである。実際の記事を取り上げる前に、東の理論をまとめよう（東 2015）。

東は、ルーマンの『情熱としての愛』を引きながら、「ある親しい間柄が恋愛と見なされるのか友情と見なされるのかを定める」（東 2015: 9）認識枠組みを「親密性のコード」と定義した。親密性のコードは友愛のコードと恋愛のコードに二分され、「親密な関係性が恋愛のコードが規定する特徴にあてはまれば恋愛とされ、友愛のコードが規定する特徴にあてはまれば友情と認識される」（東 2015: 10）。恋愛のコードとは「おもに異性間の親密さを感じさせる言動や情動を恋愛感情に由来するものとして定め……〔引用者注：人々が〕恋愛とはどのようなものか、どのような感情や行為が恋愛の範疇にあるのかを知るようになる」（東 2015: 5、中略は筆者による）る認識枠組みのことであり、友愛のコードが優位性を持つ公的領域を男性が、私的領域を女性が受け持つ社会においては女性を恋愛のコードに通熟させることこそが、「公的領域の男性支配を下支えする異性愛関係に女性を動員する」（東 2015: 58）手段であるという。

東はボーイズラブ二次創作（＝漫画やアニメにおける男性キャラクター同士の関係性を恋愛／性愛の面から解釈する営み）について、男性同士の友愛を描く作品を恋愛のコードを通じて読み替える営みであるとしている（東 2015）。『anan』における「愛の読み替え」実践は、既存の漫画・アニメ・小説の異性愛的側面を強調している点において、同性同士の関係性を恋愛／性愛と解釈するボーイズラブとは異なる。しかしながら、記事を作成するプロセスにおいて①異性愛が描かれた作品をピックアップする、②ピックアップした異性愛要素の記事として方向づける、と

いう価値判断がなされていることは確かだろう⁴⁾。例えば「男心を学べる映画 19」(2013.4.17)のような特集は、その最たる例である。以上を勘案すると、『anan』においても恋愛のコードを通じた読み替えが行われているのである。

ゆえに、本稿では『anan』における「オタク的趣味実践」のロジックのひとつとして、本・漫画・映画などを恋愛のコードに則って読み替える記事のあり方を「愛の読み替え」実践と定義づける。「愛の読み替え」実践はさらに①「恋愛／人生の教科書」化、②「イケメンキャラ」抽出の2点に分類され(後述)、それぞれの記事数の年別量的変遷は表2-1、2-2のようになる。

それでは、①「恋愛／人生の教科書」化、②「イケメンキャラ」抽出それぞれについてみていこう。

まず、①「恋愛／人生の教科書」化についてである。これは、ある本・漫画・映画から異性愛にかかわる内容を抽出し、読者に学びを促す「オタク的趣味実践」と定義づけることができる。「人生を変える本。」と題した特集が2015年と2016年に2度も組まれていることからわかるように、『anan』においては本・漫画・映画といったメディアは読者の変革を促す「教科書」として扱われている(2015.5.13; 2016.6.15)。また、「『機動戦士ガンダム』にみる愛の形。」(2017.12.6)のように、恋愛が作品の主題ではない本・漫画・映画を「恋愛の教科書」とみなす記事も存在する。このように、「恋愛／人生の教科書」化では、ある本・漫画・映画から(その作品のメインとなる題材は問わず)異性愛にかかわる内容を抽出し、読者に学びを促しているといえる。

次に、②「イケメンキャラ」抽出についてもみてみよう。これは、①「恋愛／人生の教科書」化と同じように、本・漫画・映画から男性キャラクター(=イケメンキャラ)にかかわる内容に焦点を当てる⁵⁾記事である。例えば、「検証・女がセクシーを感じる時。」のいちコーナー「“悪役”が放つ、真のセクシー。」(2014.10.15: 60-1)では、洋邦問わず、映画の中の悪役を「セクシー」という尺度から抽出し、紹介している。

このような『anan』における「愛の読み替え」実践が読者に対してもたらすのは、恋愛のコードに対する習熟度合いの強化であるといえよう。換言すれば、『anan』が生き方関連特集や

表 2-1 2000～2010 年「愛の読み替え」実践の年別量的変遷

年		2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
「愛の読み替え」実践	教科書化	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	「イケメンキャラ」抽出	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2

表 2-2 2011～2020 年「愛の読み替え」実践の年別量的変遷

年		2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	計
「愛の読み替え」実践	教科書化	1	2	2	0	1	2	2	0	0	0	11
	「イケメンキャラ」抽出	0	2	0	7	2	2	2	0	1	0	17
計		1	4	2	7	3	4	4	0	1	0	28

エンターテインメント関連特集で実践してきた『『ベタ』な『女らしさ』を再生産』（牧野 2012: 244）することであると考えられるのだ。

だが、このように恋愛を軸にコンテンツを読み替えていく『anan』の方針が、いわゆる「恋愛マニュアル」的な役割のみにとどまるかは留保が必要である。例えば、②「イケメンキャラ」抽出に分類される「愛してやまない最強ヒーロー12人」のリード文に「完璧な恋愛疑似体験ができるのは、マンガの最大の魅力です」（2010.3.3: 91）とあるように、『anan』における「オタク的趣味実践」はただ単に「身近な男性と恋愛／結婚するための」異性愛規範を再生産するだけにとどまらないのである。

3.3.2 「夢女子」的实践

「オタク的趣味実践」において、芸能人やフィクションのキャラクターに恋愛感情を抱く⁶⁾ファンは「夢女子」と呼ばれている。それにならいここでは、「男性である芸能人／漫画やアニメのキャラクターを恋愛対象としてみなす」記事を「夢女子」的实践と呼称する。「夢女子」的实践を含む記事数の年別量的変遷は、以下のようになる。

2000年代の『anan』においては、「好きな男・嫌いな男」特集に代表される男性芸能人に焦点を当てた「芸能・タレント」項目が「オタク的趣味実践」の大半を占めており、男性芸能人は異性愛規範のもとで「好きな男」ないしは「抱かれない男」といった「恋愛対象として」取り上げられていた。

また、先述の「愛してやまない最強ヒーロー12人。」（2010.3.3）や「漫画の中に理想のカレを発見。」（2014.5.28）のように、「愛の読み替え」実践で「イケメンキャラ」抽出に分類されるものもある（「夢女子」的实践に分類される全27件中7件が「イケメンキャラ」抽出と重複している）。

加えて、「夢女子」的实践は、しばしば「妄想」としても立ち現れる。「発表！ 韓流スター人気ランキング&妄想無限大の胸キュン劇場。」（2011.7.13）や、「読者が今もっとも注目する、旬の若手俳優との妄想シチュエーションを発表」する特集「勝手に妄想シチュエーション」（2015.7.8: 30-1）のように、「〇〇さんと□□なシチュエーションで△△してみたい」というような読者の語りがみられる。この「妄想」という語りの方式は、「夢女子」的实践のみにとどまら

表 3-1 2000～2010年「夢女子」的实践の年別量的変遷

年	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
「夢女子」的实践	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	2

表 3-2 2011～2020年「夢女子」的实践の年別量的変遷

年	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2000～2020年総計
「夢女子」的实践	2	3	1	4	2	1	2	1	0	0	27

ない。それを端的に表すのが、次項で取り上げる「2.5次元的实践」である。

3.3.3 「2.5次元」的实践

本項では、抽出対象のなかでも、特に漫画やアニメを題材とした記事についてとりあげる。まず、前提として「2.5次元」という用語の使われ方についてみてみよう。須川亜紀子によれば、元は1970年ごろからアニメファンの中で声優を指す用語として使用されていたという（須川 2021: 17）。しかしながら2003年以降、漫画を原作とした舞台『テニスの王子様』が人気を獲得していく過程で、漫画やゲームを原作とし「まるで二次元（アニメ）から三次元（現実）に抜け出した」かのような「キャラクターの再現性を重視した演劇、およびその『キャスト』（=俳優）」（須川 2021: 19）を「2.5次元」とファンたちが呼称するようになった。

以上の背景を踏まえ須川は、「2.5次元」とは「ストレートプレイやミュージカルの専売特許ではなく、現代ポピュラー文化（マンガ、アニメ、ゲームなど）の虚構世界を現実世界に再現し、虚構と現実のあいまいな境界を享受する文化実践である」（須川 2021: 22）と指摘する。「送り手（制作者／製作者、演技者）と受け手（オーディエンス／ファン）という二つのベクトル」が、インターネットの発達によりお互いに「プレイヤー／アクター／パフォーマーとして行動し、参加する」（須川 2021: 22）。この「相互作用」（須川 2021: 22）こそが文化実践としての2.5次元を作り出すのである。

いうまでもなく、須川のこの指摘は『anan』の持つひとつの側面を非常によく表現している。第1章でも指摘したように、「オタク的趣味実践」を取り上げた記事の作り手たちは、既存のアニメ・漫画・小説・映画といったコンテンツをそれらの受け手の立場から解釈し、あるテーマを骨子とした記事の形で再構成しているからである。

加えて、『anan』創刊50周年特別記念号においても、「ananとポップカルチャー」の題で特集ページが組まれており、「ここ数年の中でおそらく最も読者を驚かせた誌面の一つに、アニメなどのポップカルチャーを取り上げたシリーズがあります」「イラストとして描かれたキャラクターにドキドキすることは、女子にとってもはや日常です」と説明されていることも特筆すべき点である（2020.3.11: 100）。

ゆえに、『anan』が持つ「2.5次元性」を考察することは、『anan』と女性の趣味実践の関連を問う本研究の目的においてもきわめて重要であると考えられる。本項における「2.5次元」的实践は、①実写化作品、②2.5次元舞台、③妄想キャスティング、④架空インタビュー、⑤描き下ろしショットの5点に大別される。これらの年別量的変遷は表4-1、4-2のようになる。

まず、①実写化作品について取り上げる。これは、「小説・漫画・アニメなどを原作とする映画にまつわる記事の中でも、『実写化』という営為に焦点を当てた記事」を指すと定義する。具体的には、「マンガ&小説原作の映画で、年下男子を愛でる♡」（2016.8.10）や「胸が高鳴る、少年漫画の実写化♡」（2017.7.5）などがあげられる。また、「祝♡映画化 あの主人公が実写化で神キャラに。イケメン&萌えシーンをWで堪能！！」（2012.11.7）のように、「愛の読み替え」実

表 4-1 2000～2010年「2.5次元」的实践の年別量的変遷

年	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
「2.5次元」的实践	実写化作品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	2.5次元舞台	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	妄想キャスティング	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	架空インタビュー	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	描き下ろしショット	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3

表 4-2 2011～2020年「2.5次元」的实践の年別量的変遷

年	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2000～2020年総計	
「2.5次元」的实践	実写化作品	2	1	0	1	0	1	3	1	0	1	12
	2.5次元舞台	0	0	0	1	0	0	2	1	1	0	5
	妄想キャスティング	1	0	2	1	0	0	0	0	0	0	6
	架空インタビュー	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2
	描き下ろしショット	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
計	3	1	2	3	0	1	6	3	2	1	26	

践のうち「イケメンキャラ」抽出と重複している記事も3件存在する。

次に、②2.5次元舞台は、漫画やゲームを原作とする、「まるで二次元（アニメ）から三次元（現実）に抜け出た」かのような「キャラクターの再現性を重視した演劇」（須川 2021: 19）を紹介している記事と定義する。「ハマると戻れません。ミュージカル『テニスの王子様』（2014.5.28）や、「快進撃を続けるミュージカル『刀剣乱舞。』（2018.8.8）が具体例として挙げられる。

続く③「妄想キャスティング」は、「漫画やドラマ・映画を主題とした特集に存在する、『この漫画を実写化するならこの俳優にこのキャラクターを演じてほしい』という趣旨の座談会記事」と定義する。このような記事は、「夢見る妄想キャスティング！」（2010.7.14）、「あの漫画が実写になったら…♡ あなたなら、誰に演じてほしい!？」（2013.4.17）、「妄想キャスティングが楽しすぎ…♡ あの名作マンガをドラマ化したい！」（2013.10.16）、「実写なら、このキャスティングで！」（2014.5.28）などがある。これらの記事で取り上げられている漫画は、その多くが女性漫画家の手によるものであり、かつ恋愛を主題としたものでもある。これらの記事では、2次元の漫画を3次元の映画・ドラマとして読み替えることで、漫画ファンだけでなく俳優ファンをも読者として取り込む役割があると考えられる。

残る④架空インタビュー、⑤描き下ろしショットをとりあげる前に、前提として先述の創刊50周年特別記念号における「ananとポップカルチャー」特集の内容を再確認する。このような特集の特色として挙げられるのが、「アンアンでしか見られない、アンアンらしいオリジナルの絵」（2020.3.11: 100）が掲載されたグラビアページである。それらのグラビアページはアニメの作画スタッフの手による「新規絵」なのであり、言うなれば3次元タレントのインタビュー記事に掲載された撮り下ろし写真と同じ役割を果たしている。

順番は前後するが、⑤描き下ろしショットもこの系譜にあたる。ここでの「描き下ろしショット」の定義は、描き下ろしイラストの中でも、「特別描きおろし！ アンアンでしか見られない、デクと爆豪のツーショット。」(2019.12.18)のように、記事内の説明文に「実際の」グラビア撮影を想起させる用語が含まれているものを指す。このように、アニメ・漫画といった2次元コンテンツを主題とした記事に「撮り下ろし」要素を加えることは『anan』のお家芸であるといえる。

このような「撮り下ろし」要素の最たる例が、④架空インタビューである。なお、ここでいう「架空インタビュー」とは、「架空の男性タレントグループを題材とした2次元コンテンツの記事において、『(本来非実在であるはずの)キャラクターそのものに対して』インタビューを行っている記事」と定義する。

例えば、男性アイドルグループが主人公のアニメを複数取り上げた記事「きらめくアイドルアニメ・スター名鑑。」(2017.12.6)では、アニメ作品それぞれのキャラクターを野球やサッカーの選手名鑑のような形で網羅的に掲載しており、一人一人の項目には『anan』編集部からの質問に答えるコーナーが設けられている。ソーシャルゲーム『A3!』を特集した記事「『A3!』から無限に広がるときめきの世界に迫る。」では、「メンバーの直筆メッセージ付き組別・キャラクターファイル」と題し、「実際の」アイドル雑誌のようにキャラクターが質問に答えるほか、キャラクター「直筆の」サインが入ったチェキ(ポラロイドカメラで撮影される写真)が当選する企画が組まれている(2018.8.8: 60)。

概して、④架空インタビューや⑤描き下ろしショットといった記事群は、「もしあのキャラクターが『anan』に出たらどんなふうにかかれる／撮られるだろうか」という読者の欲求を充足させているといえる。漫画・アニメ・ゲームからキャラクターが生まれ、『anan』が(キャラクターの権利元と協働しつつ)そのキャラクターを『anan』という場の枠組みの中で解釈し、記事を生成する。その記事を読者が読むことで、読者は「原作」(=『anan』の記事の題材となった漫画・アニメ・ゲーム)の解釈の幅を広げていく。原作／『anan』／読者の3者が相互に意味を生成していくという点で、文化実践としての「2.5次元」性をよく表しているといえよう。

4 考察

4.1 恋愛観の転換と「オタク的趣味実践」

牧野が指摘するように、『anan』は主に恋愛や女性の生き方をとりあげた特集において『「ベタ」な『女らしさ』を再生産』(牧野 2012: 244)する、すなわち異性愛規範をも再生産する役割を担ってきた。対して、「オタク的趣味実践」の主体であるオタクたちは、第2章でも見てきたように、「趣味にかまけて恋愛を疎かにしている」「コミュニケーションが不得手である」というステレオタイプにもさらされてきた。一見真逆のように思えるこの2点が、いかにして『anan』誌上で手を組むに至ったのか。

ここまでとりあげてきた「愛の読み替え」実践、「夢女子」的实践といったロジックには、いずれも「恋愛」というタームが密接に関わっている。谷本奈穂は、1970年代・1990年代・2000年代という3つの年代の雑誌記事を分析し、恋愛言説では「感覚や趣味、あるいはノリといった感性に訴えるものの類似」（谷本 2008: 153、傍点原文ママ）が異性の魅力として語られていることを指摘している。

加えて、第2章1節で取り上げた辻によるアンケートにおいて自分を「オタク」とであると認識する若者が半数近くを占めていたように、「オタク的趣味実践」の主体となる者たちは今や決してマイノリティではないと推定される（辻 2012a）。

以上の知見を重ね合わせることで、『anan』において「オタク的趣味実践」を可能としているジェンダー規範が浮かび上がってくる。すなわち、「オタク」と自称する人々が増えたことで、多くの若者が「オタク」として自分と似た趣味を持った異性を求め、かつそれが『anan』の持つ恋愛マニュアル的側面と共鳴したことで、『anan』が「オタク的趣味実践」を取り上げることは異性愛規範の範疇に収まることになった、と考えることが可能なのである。

実際、「山本美月さん、宇垣美里さんが語る。私が“熱狂”にハマる理由。」と題された記事では、「芸能界きっての“オタク心”を持つお二人、山本美月さんと宇垣美里さんにインタビュー！『これだ！』という作品に、熱狂的に愛することの喜びや楽しさを、それぞれの視点から思う存分語ってもらいました」（2019.12.18: 32）というリード文が見受けられた。「熱狂」というワードが見出しについてはいるものの、その言葉が「オタク」性を含意していることが読者に対して共有されているのである。『anan』の読者が「オタク的趣味実践」の担い手であることは、もはや公然の秘密ですらある。

4.2 「2.5次元」的転回

それでは、『anan』と読者の関係性／読者と男性タレントの関係性はどのようなものであるのか。

まずは、前述した「妄想キャスティング」「架空インタビュー」といった記事における読者と男性タレント（もしくは男性キャラクター）の関係性について考えていく。もちろん、女性読者が男性タレントと関係性を結ぶための手段は「夢女子」的实践だけではとどまらない。辻は、近年のアイドルのファン文化においてファンのスタンスが「疑似恋愛関係の『当事者』から、アイドル同士の関係の『観察者』に遷り変わった」（辻 2012b: 28）としている。これが示唆するのは、「夢女子」的实践のような「当事者」としてだけではなく、自らが関係性の当事者とはならない「観察者」としても関与するということである。

まさにこの「観察者」的振る舞いこそ、「妄想キャスティング」や「架空インタビュー」が主題とするところである。「妄想キャスティング」では漫画の実写化の配役を決める位置（＝コンテンツの作り手の位置）に、「架空インタビュー」では「我々と同じ次元に位置する（と想定された）」あるキャラクター／コンテンツに関する記事をまなざす位置に読者が座ることとなるの

表 5-1 2000～2010 年「愛の読み替え」実践／「夢女子」的实践／「2.5 次元」的实践の年別量的変遷

年	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
「愛の読み替え」実践	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
「夢女子」的实践	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	2
「2.5次元」的实践	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3

表 5-2 2011～2020 年「愛の読み替え」実践／「夢女子」的实践／「2.5 次元」的实践の年別量的変遷

年	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2000～2020年総計
「愛の読み替え」実践	1	4	2	7	3	4	4	0	1	0	28
「夢女子」的实践	2	3	1	4	2	1	2	1	0	0	27
「2.5次元」的实践	3	1	2	3	0	1	6	3	2	1	26

だ。

ここで、「愛の読み替え」実践／「夢女子」的实践／「2.5 次元」的实践それぞれの量的な推移をみてみよう。

上の表 5-1、5-2 から、2018 年を境に「愛の読み替え」実践や「夢女子」的实践が姿を消し、2010 年ごろからは「2.5 次元」的实践が台頭していることがわかるだろう。「妄想キャストイング」や「架空インタビュー」が 2010 年代以降の記事であることからもうかがえるように（表 4-2）、『anan』の特集の重心は 2010 年代後半を大まかなターニングポイントとして「夢女子」的实践から「2.5 次元」的实践へと移動しつつある。「夢女子」的实践から「2.5 次元」的实践へ、当事者から観察者へ。『anan』における読者と男性タレントの関係性は、「2.5 次元以前／以後」に分けられる。本稿では「2.5 次元」的転回と呼称するこの現象は、『anan』と読者の関係性に着目した際においてその骨子となる価値観を異性愛から「2.5 次元」へと入れ替える役目を果たしたのである。

4.3 『anan』における「女オタク」像

『anan』が想定する「女オタク」のあり方は、「2.5 次元」的転回によって当事者から観察者へと転換しつつある。しかしながら、当事者から観察者への転換はすでにすっかり完了しきってしまったのだろうか。結論から言ってしまうと、「2.5 次元」的転回は未だ完遂していない。現在の『anan』は、異性愛規範を再生産する自らの立場と「2.5 次元」的实践を行う立場の間で揺れている。

例えば、2020 年の特集「いま、愛される男たち。」では、「オタク」当事者や臨床心理士によってファン心理が「応援することで得る達成感」「共感から生まれる自分への肯定感」「疑似恋愛感覚のときめき」「現実離れた理想の存在」「第三者として成長を見守る心地よさ」「人間同士の幸せな関係性に癒される」（2020.10.14: 29-30）など 11 の観点から説明され、読者アンケー

トの結果からはファン心理が「尊敬、恋愛、見守りたい…。気持ちの形は人それぞれ」(2020.10.14: 31)と説明されており、異性愛規範を包含したまま「オタク的趣味実践」が行われていることがうかがえる⁷⁾。

同様のことは、心理テスト記事からもうかがえる。本稿の分析対象である2000年～2020年の特集からは外れてしまうが、2021年の特集「愛しいきもち。」を例にあげよう。表紙左上に「推し」のいる暮らしは、こんなに煌めいています！」と銘打たれたこの特集では、その趣旨が以下のように説明される。

愛しいきもち — それはいつだって、自分のなかに予告なく生まれ、あふれ出す。“誰か”に対する想い、あるいは架空の存在やコンテンツに対する想いだとしても、愛を抱くことはそれ自身が喜びであり愛する時間や共感がさらなる幸せを運んでしてくれるものなのです。自分のなかにある愛の種に、向き合ってみませんか？ (2021.2.17: 26)

この「愛しいきもち。」特集には3つの心理テストが用意されているが、その中のひとつが「あなた自身の魅力を高める愛しさUP術をチェック！」と題され、「潜在的な“愛しさ”が開花し」「人間関係や仕事、恋愛でも、ちょっぴり得できちゃうかも」(2021.2.17: 103)と説明される。また、先述の特集「いま、愛される男たち。」に掲載された心理テスト「いま、欲している関係性は？」においても、診断結果は「親友」「恋人」「カリスマ」「推し」「メンター」(2020.10.14: 34-5)の5つにカテゴリー分けされていた。

「いま、愛される男たち。」特集や「愛しいきもち。」特集のように、心理テストを通じて「自らの内面を技術的に強化し、鍛え、磨き、高め、ポジティブになることができる」(牧野 2012: 163)というメッセージを発信する企画は、1990年代から続く『anan』の鉄板である(牧野 2012: 152)。『anan』における「オタク的趣味実践」は、異性愛規範と「2.5次元」的实践の間を往還するだけでなく、「『女らしさ』という枠の中で『自分探し』『自分磨き』を促し支援する」(牧野 2012: 182)という軸を未だ保持したままであると考えられる。

それでは、異性愛規範と「2.5次元」的転回の間において、「女オタク」たちはどのような消費活動を行う存在であると規定されているのか。

ここで重要なのが、2010年代後半以降の抽出号の第1特集名によく登場するフレーズ「体感／熱狂」である。具体例としては、「熱狂の現場。」(2018.9.12)、「熱狂の秘密。」(2019.12.18)、「熱狂のカタチ。」(2020.9.30)、「体感する映画」(2019.8.7)、「体感せよ！エンタメの最新形。」(2020.7.15)といった特集があげられる。

これらの特集はコンテンツよりもむしろその受け手となる『anan』読者の行動に焦点を当てたものであり、「送り手(制作者／製作者、演技者)と受け手(オーディエンス／ファン)という二つのベクトル」がインターネットの発達によりお互いに「プレイヤー／アクター／パフォーマーとして行動し、参加する」(須川 2021: 22)という「2.5次元」舞台の性質、ひいては「2.5

次元」的实践とも密接に関連するといえる。

以上より、2010年代以降の『anan』が想定する「女オタク」像は、「夢女子」的志向のもとで「当事者」としてふるまうことと「2.5次元」的志向のもとで「観察者」としてふるまうことや、コンテンツの送り手／受け手といった複数のレイヤーを往還しつつ、自発的にコンテンツを「体感」しようと欲する人物であると結論づけることができよう。

ここまで、『anan』における「オタク的趣味実践」は、異性愛規範と「2.5次元」的实践の間を往還するものであることを示してきた。しかしながら、『anan』における「女オタク」は本当に「『ベタ』な『女らしさ』」（牧野 2012: 244）を再生産するだけの存在なのだろうか。先ほど引用した「愛しいきもち。」特集を再びみてみよう。特集内記事「わたしの幸せな“推し活”♡」では、このようなリード文がある。

“推し”というのはスターだけにあらず！ 愛しいとかかわいいとか、好きと思うものならば、食べ物でも動物でも、それは立派な“推し”です。この8ページでは、オリジナルな“推し”を追いかけている6人をご紹介します。みなさんの充実の“推し活”っぷり、読むだけでこっちも幸せになる～。(2021.2.17: 59)

引用部分からもうかがえるように、この特集においては、動物やグルメ、都市やデザインといった、男性タレント／キャラクターではない「推し」について語られている。『anan』における「オタク的趣味実践」が、「2.5次元」的転回を経て、（まだ不完全ながらも）異性愛規範から脱皮しつつあることが推量しうるのではないだろうか。

5 おわりに

本稿では、女性向けライフスタイル誌『anan』の分析を通じ、『anan』における「オタク的趣味実践」が「愛の読み替え」実践・「夢女子」的实践・「2.5次元」的实践の3つの顔を持つこと、さらにその「オタク的趣味実践」の骨子が異性愛規範から「2.5次元」的な消費の仕方へと転換する「2.5次元」的転回が起こっていること、『anan』にとっての「女オタク」とは異性愛規範と「2.5次元」的な消費形態の間で揺れながらも好きなコンテンツに没入する実践の担い手でもあること、以上3点を確認できた。

もちろん、本稿の知見には限界もある。本稿が考察したのは『anan』の中に描かれた「女オタク」や「オタク的趣味実践」についてであり、実際の「女オタク」たちの実践は、必ずしも本稿の内容と全く同じロジックに従ってはいはないだろう。しかしながら、「コンテンツの作り手でもあり受け手でもある」という雑誌メディアの特色に着目した「女オタク」論を実現したことや、『anan』における「オタク的趣味実践」が従来『anan』の特徴として論じられてきた異性愛規範をズラしながら進行していることを発見したことに関しては、本稿は一定の新規性と意義が

あると思われる。『anan』読者の視点が描かれなかったのは、単に筆者の力不足でしかなく、雑誌に込められたメッセージが読者によってどのように解釈されているのかについては今後の研究を待つばかりである。

若者たちの約半数が「オタク」を名乗るこの時代においては、人々に自覚があらうとなかろうと、「女オタク」はつねに人々の近くにいる。ところが、我々「女オタク」たちはまさに「女」であるがゆえに日々抑圧され、生きづらさの錘を背負わされている。それに立ち向かうため我々に必要な戦略は、まずは敵の姿を——我々を抑圧する「世間の声」を——知ることである。長年多くの女性に読まれてきた『anan』を分析することで、女性の「オタク的趣味実践」が称揚されるには異性愛規範を通過せねばならなかったという側面を描き出すことができた。「女オタク」とそうでないもののはざまにおいて「女オタク」たちを取り巻く状況を腑分けしていくところ、我々「女オタク」が名前と人格を持った一個人として（いままでも、そしてこれからも）生き続けるために必要な戦い方のひとつであると筆者は確信している。

註

- 1) 永田大輔によれば、「オタクという言葉の記法には一般的には平仮名で『おたく』と書く場合、片仮名で『オタク』と書く場合の二つが存在し、時期ごとに大きくは80年代から90年代までは平仮名で書かれることが多く、90年代中盤からは片仮名で表記されることが多い」（永田 2017: 143）。永田が指摘するように、「おたく」/「オタク」という「記法自体が高度に文化政治的な問題」（永田 2017: 143）を孕むが、本稿では便宜上、「オタク」表記で統一する（「おたく」/「オタク」のほか「ヲタク」という記法もあるが、そちらも同様に扱う）。なお、先行研究を参照・引用する場合は文獻内の記法に従う。
- 2) 近年、「腐女子」という呼称には「男性同性愛対象を『腐っている』と定義することはホモフォビアではないか」という批判もある。本稿においてもその立場をとり、先行研究の引用以外の形式において「腐女子」という呼称は使用しない。
- 3) 本分析では、基本的に表紙の見出し文字の中で最も面積を占めている特集を「第1特集」と分類する（『anan』誌面で第2特集・第3特集と明記された特集が存在する場合はそれに従う）。ただし、例えば見出し文字で最も大きく取り上げられている特集Aともうひとつの特集Bを比較した際、Bの方が明らかにページ数が多い場合はBを第1特集とみなす。また、表紙が左右または上下に2等分され、それぞれひとつずつに対して1点の図像を使用した表紙である場合は、「第2特集」の表記があった場合でも2つの特集が並立しているものであると判断する。なお、第1特集の分類については、特集ひとつにつきそれが最も強くフォーカスしている項目を1点のみ割り振り、複数の項目を分類することはしていない。第1特集の見出し文だけで内容の判断がつかなかった場合、目次等を参照して判断している。
- 4) もっとも、①と②は順序が逆であっても成り立つ。どちらの場合においても、ある作品を異性愛規範を通じて読み解くということには変わらない。
- 5) ここでいう「イケメンキャラ」というのはあくまで役名の存在（＝作中のキャラクター）を指すものである。「愛の読み替え」という物語自体の解釈にかかわる実践であるため、「彼ら目当てに見る女子、続出。海外ドラマはイケメンの宝庫！」（2010.9.8）のようにそれを演じる俳優に焦点を当てた記事は

除外している。

- 6) 「夢女子」について語られる際、頻繁に引き合いに出される単語が「疑似恋愛」である。しかしながら、「夢女子」当人が抱く強い思い入れを他者が「疑似」とジャッジすることに筆者は違和感を覚える。「疑似恋愛」という単語を無批判に使うことで、自分との間に相互に関係性が築かれうる「身近な男性」と性的に結ばれることこそが「真正」であるとする従来の異性愛規範をなぞる形になりはしまいか。以上より、本稿では（引用の場合を除き）「夢女子的実践」に対して「疑似恋愛」という用語は使用しない。
- 7) もっとも、「2.5次元」的实践の中にも「夢女子」としての実践が含まれている（須川2021: 128）ため、ここでいうファン心理が「2.5次元」的实践の一環として異性愛規範的なものを含んでいる可能性は否めない。しかしながら、『anan』という雑誌自体が「2.5次元的転回」以前から異性愛規範を推奨する方向性をとっていたことを考慮すれば、「2.5次元的転回」以前の夢女子的実践の流れを汲むものであるとも解釈可能だろう。

参考文献

- 東園子、2015、『宝塚・やおい、愛の読み替え — 女性とポピュラーカルチャーの社会学』新曜社。
- CanCam.jp、2020、『CanCam』2020年5月号」、(2022年10月23日取得、<https://cancam.jp/cancam/202005>)。
- 幻冬舎、2020、『GINGER』12(6)。
- 劇団雌猫、2017、『浪費図鑑 — 悪友たちのないしょ話』小学館。
- 、2018、『シン・浪費図鑑 — 悪友たちのないしょ話2』小学館。
- 池田太臣、2012、「オタクならざる『オタク女子』の登場 — オタクイメージの変遷」馬場伸彦・池田太臣編『「女子」の時代!』青弓社、123-54。
- 井上輝子・女性雑誌研究会、1989、『女性雑誌を解説する COMPAREPOLITAN — 日米メキシコ比較研究』、垣内出版。
- 好書好日編集部、2021、「第164回芥川賞に宇佐見りんさん『推し、燃ゆ』、直木賞は西條奈加さん『心淋し川』」、(2022年10月23日取得、<https://book.asahi.com/article/14109749>)。
- マガジンハウス、2022、「anan Backnumber」、(2022年10月23日取得、<https://magazineworld.jp/anan/back/>)。
- 牧野智和、2012、『自己啓発の時代 — 「自己」の文化社会学的探究』勁草書房。
- 松谷創一郎、2008、「〈オタク問題〉の四半世紀 — 〈オタク〉はどのように〈問題視〉されてきたのか」羽渕一代編『どこか〈問題化〉される若者たち』恒星社厚生閣、113-140。
- 永田大輔、2017、「『オタクを論ずること』をめぐる批評的言論と社会学との距離に関して」『年報社会学論集』(30): 134-45、(2022年10月23日取得、https://www.jstage.jst.go.jp/article/kantoh/2017/30/2017_134/_pdf/-char/ja)。
- 一般社団法人日本雑誌協会、2022、「anan」(2022年10月23日取得、<https://www.j-magazine.or.jp/user/printed2/mag/5>)。
- 一般社団法人日本雑誌広告協会、2022a、「『雑誌ジャンル・カテゴリ区分』最新表」(2022年10月23日取得、<http://www.zakko.or.jp/subwin/genre.html>)。
- 、2022b、「雑誌ジャンルおよびカテゴリ区分一覧」(2022年10月23日取得、<http://www.zakko.or.jp/subwin/pdf/genre.pdf>)。
- 斎藤美奈子、2000、『モダンガール論 — 女の子には出世の道が二つある』マガジンハウス。(再録：斎藤

美奈子、2003、『モダンガール論』文春文庫。）

須川亜紀子、2021、『2.5次元文化論——舞台・キャラクター・ファンダム』青弓社、

宝島社、2021、『mini』（263）。

谷本奈穂、2008、『恋愛の社会学——「遊び」とロマンティック・ラブの変容』青弓社、

辻泉、2012a、「オタクたちの快樂」小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編『若者の現在 文化』日本図書センター、305-326。

——、2012b、「『観察者化』するファン——流動化社会への適応形態として」『AD・STUDIES』（40）：28-33。

付記：本稿は、2022年に京都大学大学院人間・環境学研究科へ提出した修士論文「『女オタク』の表象——女性向け雑誌『an・an』を例に」を加筆修正したものである。